

数年前の正月七草のころである。Mさんが住む借家の大家さんから電話があった。「Mさんの家で連日、家探ししている人たちがいるんです」

Mさんは、「私たち、りすシステムとの間で、遺体の処理や葬儀など死後の事務を行う生前契約を結んだ女性である。数日前に突然倒れて入院してい

るで、病院に頼まれ保証人になったという。入院費の支払いに備え、Mさんの連絡などを探しに来ていたらしい。そこで私たちの生前契約の書類を見つけ、連絡してきたと言つた。

人生締めくくり 自分らしい最期

松島 知城

◀⑤

た。危篤状態とはいっても、Mさんがまだ生きているのに、「この冷蔵庫は誰々に、テレビは私がもらおう」となど話声が聞こえるので、大家さんは心配になつたようだ。

前後して、Mさんの学校時代の友人という女性から電話を受けた。「家探し」

をする責任がある。契約でMさんは、「家にあるすべての物は、人知れず処分してほしい」となつていた。

入れ、タンスの引き出しの中身や、パソコンの記録など人の目に触れないように、信頼できる商務物販業者を頼んで処分に立ち会う。

長年の友人や家族でも、さまざま生き方があり、知られたくないこともあります。Mさんのプライバシーは、私たちとの生前契約によって辛うじて守られたが、身の回りの後始末についても生きていける間に考へ、準備しておかなければなりません。公開される結果になってしまふ。

古いじたく読本

死後のプライバシー



主なき家の持ち物を処分するアドバイザーラー=東京都内で

毎週木曜日に掲載